平塚飄斎小論

小林丈広

筆者は、この小論で取り上げる平塚飄斎について、これまで何度か言及したことがある。とくに、「幕末維新期の都市社会」においては、平塚のような京都町奉行所与力を「改革派与力」と規定し、その幕末期における役割に着目した(1)。ただ、紙幅の関係で、平塚に関する研究史に触れることができず、平塚をこのように規定することの意義について詳しく述べることができなかった。そこで、小文ではまず、あらためて平塚をめぐるこれまでの研究の歩みを振り返り、その幕末期の京都における役割について考えることにしたい。

その際、平塚が書き残しした数多くの著作（版行されたものばかりではなく、未刊行の手稿や公開目的ではなかったと思われる雑稿類、各史料保存機関で収集した古文書・書簡類などを含む）のすべてを検討する必要があるが、小文ではなお、一部の著作の検討を終えたところであり、後考を要するところがあることをあらかじめお断りしておく。

第一章　平塚飄斎をめぐる研究史

(1) 陵墓研究から知識人論へ

平塚飄斎（茂喬・表次郎、飄斎はその時々で名を使い分けるが、小文ではとくに必要がない限り、飄斎とした）については、これまで天皇陵をはじめとする陵墓の研究家として取り上げられることが多かった。平塚は、近世の陵墓研究の古典でもある『陵墓一隅抄』や『聖蹟図志』の著者であった（いずれも嘉永七年＝安政元年・一八五四年刊行）。これらの著作は、近世の陵墓修補事業のなかでも重要な位置を占める文久期の修陵に影響を与え、平塚自身も調方に任じられて調査に携わった。

管見の限り、陵墓研究家としての平塚に最初に着目したのは、松村巌「京都の与力平塚飄斎山陵取調の偉功」(2)であった。松村氏によれば、平塚は陵墓研究を通じて水戸藩士鵜飼吉左衛門らと交わり、山陵会では三条実万、大久保要（大坂城代土屋采女側用人）らとともに語り合い、そうした活動を通じて得られた知見をもとに、安政二年に京都西町奉行浅野長祚に陵墓の調査と修復の必要性を献策したという。

松村氏の研究は論文というより史料紹介とでもいうべきものであったが、本多辰次郎「山陵研究家平塚瓢斎翁」、『皇陵』、和田軍一「皇陵」などに受け継がれ、平塚を陵墓研究の中に位置づけるのに大きな役割を果たした(3)。

このうち、本多辰次郎氏は宮内省図書寮編修官をつとめた人物であり、その論文は、宮内省による平塚家調査の成果を踏まえたもので、その後の平塚研究の基本文献となった(4)。本多論文が重要なのは、平塚が、『陵墓一隅抄』などを発刊したのと同じ年に、三条実万らとともに山陵会という会合を立ち上げ、その活動の肝煎（中心的存在）であ

ったことを指摘したことである。平塚はその後、文久の修陵事業においても、山陵奉行戸田忠至（宇都宮藩）のもと、谷森善臣、北浦定政、砂川政教らとともに調方を務めるが、それに先立つ山陵会の肝煎として評価されることで、平塚の先駆性がより強調されたのである。『皇陵』もその評価を踏襲し、和田論文は、嘉永五年頃から京都西町奉行浅野長祚と平塚が中心になって行った陵墓調査を、文久の修陵事業に先立つ事業として高く評価した。

これら一連の研究は、戦前において陵墓の考証と保存を所管した宮内省諸陵寮の研究成果をもとにしたもので、戦前の陵墓研究の到達点でもあった。

松村氏によって指摘された平塚と山陵会との関係は、本多論文をはじめ、川田瑞穂「平塚飄斎」、海音寺潮五郎・山村耕花画「小説平塚飄斎」、寺田剛・雨宮義人『山陵の復古と蒲生秀実』などに受け継がれ、戦前の陵墓研究者の間では広く流布したものと思われる(5)。

しかし、戦後になると、平塚の取り上げ方に微妙な変化が見られるようである。

戦後の歴史学研究の中で陵墓を本格的に取り上げたのは、戸原純一「幕末の修陵について」であった(6)。戸原論文は、宮内省諸陵寮の収集史料を活用し、文久の修陵事業を正面から論じ、その中で調方平塚飄斎についても言及した。しかし、戸原論文は、それに先立つ嘉永から安政期の陵墓調査や山陵会などには触れず、平塚についても特別な位置づけは行わなかった。さらに、安政期の陵墓調査について検討した川田貞夫「幕末修陵事業と川路聖謨」は、京都西町奉行浅野長祚の人物像にまで迫りながら、平塚には全く言及していない(7)。数少ない事例から、戦前と戦後の研究のあり方を即断することは控えたいが、戦後の研究が近世の陵墓研究について検討する場合、関係者の顕彰ではなく、その政治的背景などに関心が集まるのは当然のことであるが、その中では、平塚や尊王論者の文化サークル的な色彩が強かった山陵会などといった存在についての本格的な検討はなかなか行われなかった(8)。とくに山陵会につ

いては、その実態をうかがわせる史料が乏しいことも、研究が進展しなかった一因と思われる。

ところが、一九八九年の天皇代替わりを契機に、陵墓についても、近代天皇制を支える思想的・社会的基盤の形成過程を解明する手がかりとして関心が高まった。その後の各陵墓と地域社会との関係についての実証研究の進展には目を見張るものがある(9)。ただ、その中においても嘉永～安政期の陵墓調査や山陵会への言及は必ずしも多くはなかった。幕末公家社会の中での三条実万の役割に着目した佐竹朋子氏が、山陵会の会主を平塚と推定していることが注目されるが、上田長生氏は谷森善臣が「中心的な位置を占めた」と述べており、山陵会のさらなる実態解明が待たれるところである(10)。

そこで視点を変えて、平塚の著作をめぐる戦後の研究をたどると、大きく分けて二つの関心から言及されることが多い。ひとつは、陵墓に関する文献研究が精緻になる中で、平塚の著作の内容に着目し、近代的な学問の体系が確立しない幕末という時代において、可能な限りの現地踏査と文献による考証の両面から陵墓の比定に寄与した人物、すなわち考古学研究の先駆者として評価するものである。

戦後の陵墓研究を推進してきた堀田啓一氏や外池昇氏らの研究も、平塚に言及する際には、『陵墓一隅抄』などといった著作を高く評価する立場であり、平塚の政治的・社会的役割にはあまり言及がない(11)。和田萃「山陵家平塚飄斎」などもそうした研究の中に含まれよう。近世の在野研究者である平塚の著作を学問の歴史の中に位置づけることは、戦前の宮内省による陵墓考証を再検証することにもつながり、戦後歴史学や考古学が平塚を評価するための有力な視点となった(12)。

もうひとつは、国文学研究の進展に伴い、近世の随筆や紀行文などが次々と翻刻・公刊される中で、多くの著作を残した文筆家の一人として平塚に注目するものである。こうした研究を代表するのは、戦前に書かれた森銑三「平塚

飄斎翁の研究」である[13]。また、戦後に翻刻された「病間漫筆」や『花洛名勝図会』の解題もこの系統に属するものといえよう[14]。

(2) 経世論と能吏としての活動への注目

戦後、平塚自身の政治的・社会的役割についての研究が深まらない中、平塚の人物像については、本多辰次郎「山陵研究家平塚瓢斎翁」、川田瑞穂「平塚飄斎」、森銑三「平塚飄斎翁の研究」などを超えるものは現れなかった。

このうち、本多氏と森氏の研究はある程度知られているが、川田氏の研究は『京都日出新聞』という京都の地方新聞に連載されたものであり、従来の陵墓研究でもほとんど参照されたことはない。それをここであえて取り上げたのは、川田氏が、宮内省と並んで平塚の調査を行ってきた維新史料編纂会（戦後、東京大学史料編纂所に史料が統合される）に在籍してその研究成果を利用するなど、独自の視点で平塚を評価しているからである。

ここで、参考までに川田論文の目次を掲載しておこう（表1）。川田論文には、手書きの原稿「贈正五位平塚飄斎伝」（一九一七年七月、以下「川田原稿」と記す）と『日出新聞』の連載「平塚飄斎」（一九一八年一月～二月、以下「川田論文」と記す）の二種類があるが、両者の目次を比較すると大きな違いがあることがわかる[15]。川田原稿は、タイトルからもうかがえるように、大正天皇の即位を機に数多くの歴史上の人物に位階が追贈された際、平塚がその中に含まれたことを記念してまとめられたものである[16]。したがって、松村氏による史料紹介などを活用して、平塚の勤王事績、すなわち陵墓研究と関連事業に関する記述に大きな比重を割いている。

しかし川田論文の方は、川田原稿には見られない「物価調節」「貧民救助」「運漕路開拓」などの各章を新たに設け、陵墓関係以外の平塚の活動を詳述する。たとえば、「物価調節」では、物価高騰時に買い占めなどで暴利を貪ろ

表1　平塚飄斎の伝記

「贈正五位平塚飄斎伝」目次	「平塚飄斎」目次		
			『日出新聞』連載回
	小引		1
1 字号及ビ父祖同胞	其一　字号及父祖同胞		1
2 与力時代	其二　与力時代	(1) 官場の美談	2
		(2) 飄斎と大塩平八郎	2
		(3) 飄斎と羽倉外記	3
		(4) 致仕	3
3 山陵調査	其三　山陵調査	(1) 修陵の由来	4
		(2) 山陵会、藤田東湖の推重	4
		(3) 浅野蒔潭の謝状	4
		(4) 大久保要の月旦	5
		(5) 修陵に関する上書	5
		(6) 戊午の疑獄	6
		(7) 天朝の褒詞	7
		(8) 修陵の竣工	7～8
		(9) 幕府の抜擢	8
	其四　物価調節	(1) 文久元年の勅諭	9
		(2) 油価引下	9
		(3) 奸商検挙	10
		(4) 当時の物価	10
	其五　貧民救助	(1) 米銭施与	11
		(2) 廩米安価払下	12
		(3) 粥の焚出	12
		(4) 当時の篤志家	13
	其六　運漕路開拓	(1) 西高瀬の拡張	14
		(2) 日岡峠の開鑿	14
4 著述	其七　著述	(1) 陵墓一隅抄、聖蹟図志、柏原聖蹟考	15
		(2) 五畿内掌覧図	16
		(3) 花洛名勝図会	16
		(4) 海防論と牧民心鑑解	17
		(5) 爾余の著作	17
5 交友（1）頼山陽（2）大久保一翁（3）小栗政寧（4）松浦武四郎（5）楫取素彦	其八　交友	(1) 当世の才俊	18
		(2) 頼山陽との交情	18～20
		(3) 名妓と好此節	20
		(4) 大久保一翁との関係	21～22
		(5) 探検家の奇文	22
		(6) 忘年の友楫取素彦	23
		(7) 蘭医と烈士	24
		(8) 春日潜庵との交際	25～26
	其九　家庭に於ける飄斎	(1) 多病長寿	27
		(2) 晩年の日常	28
		(3) 前各章補遺	29
6 其ノ死・其ノ子孫	其十　終焉と子孫		30
	其十一　結論		30

うとした商人の取り締まりを行った経緯を詳しく紹介し、「運漕路開拓」では、幕末に関わった西高瀬川と日岡峠の開鑿事業について述べる。

川田論文は、これらの各章の中でも、「貧民救助」について連載の三回分を割いて詳述する。とはいえ、天保の救済活動については、与力時代のエピソードとして大塩平八郎と平塚を比較するために触れられる程度で、「貧民救助」の内容はすべて慶応の救済活動に関するものであった。いずれにしても、川田論文が「物価調節」「貧民救助」「運漕路開拓」の各章で記述したことは、かつて平塚家が宮内省諸陵寮に提出した履歴にも書かれているので、本多論文でも若干の言及を行ってはいるが、川田氏が初めて本格的に論じたのである。

川田論文は、平塚の町奉行所与力すなわち行政吏としての事績や、社会政策家・社会活動家としての側面に積極的に光をあてる。そこにこそ、平塚の重要な一面があることを示したのである(17)。一方、川田論文よりも後に書かれた森論文は、本多論文は活用しているものの、川田論文は参照していない。森氏も、平塚家が提出した履歴をもとに救済活動や開鑿事業に触れるが、その内容には踏み込まず、あくまでも中島棕隠・頼山陽などとの文人としての交わりに焦点をあてたのである。

三人の歴史家が描く平塚像の違いは、それぞれが歴史を研究するにあたっての目的の違いによるものといえよう。本多氏は宮内省図書寮編修官として、平塚を、あくまでも陵墓研究の先駆者として位置づけることに主眼があった。それに対して、維新史料編纂会に所属した川田氏は、当然のように、幕末維新期を生きた平塚の政治や社会との関わりに関心を寄せた。一方、書誌学・図書館学から国文学への道を歩んだ森氏は、文人としての平塚にのみ関心があった。森氏も、平塚家が提出した履歴によって平塚の社会的活動は知っていた。また、一九二五年から一九三八年にかけて東京帝国大学史料編纂所に在籍しており、史料的条件にも恵まれていたと推測されるが、あくまでも文人として

の平塚の人間像を描いたのである。

戦前にはこのほか、経済史学者遠藤佐々喜（万川）氏が平塚に注目していたことが知られる。東京帝国大学史学科から三井家同族会事務局に就職した遠藤氏は、古書店などで経済史関係の史料を精力的に収集した[18]。おそらく、その過程で平塚が記したと思われるいくつかの古書に出会い、注目したのである。同志社大学経済学部図書館が所蔵する『仁風集覧』の奥付に貼られた貼紙の文面は、同図書館が収集する前に同書を所蔵していたのが遠藤氏であったことを示している[19]。

註記　本書の編著者は有名なる京都町奉行与力平塚飄斎其人也、飄斎又の姓名をば津久井清影ともいへり、寛政六年に生れ明治八年に歿す、享年八十有【四】二歳、其詳伝、近頃刊行の雑誌、歴史地理〈第十二巻第六号／大正元年十二月刊行〉に本多文学士のものせる一篇あれとも、山陵研究家としての伝也、篇中載するところの著述目録に漏らせたるものに先づこの「仁風集覧」あり、又「古今〔ママ〕米銭考」〈近刊、活版中ノ随筆集誌中ニも収めり／半紙四折仕立小本一冊〉もあり、但シ其目録中に「救荒仁風扇」の著あるを示せるが、予も嘗て其実物を三井家に於て実見したれど〈二種一組／扇地紙形弐枚〉、未た其著者の平塚翁ある〔を知らざりし〕ことを已ニ彼の著米銭考によりて之を知れり、そのものは嘉永【六】三年中、同しく京都市中救米に関するものなり、稀覯の珍品【なる】なれバ世に知る人少かるべし、さてこの仁風集覧の成りし慶応三年の四月にハ平塚翁ハ市中御救の粥焚御用を勤め又安価払下米御用か鞅掌し其功を以て銀五枚を賞与せられたりといふ、而してこの書の先蹤たる「仁風一覧」は享保【九】十九年浪華書林中の刊行にして全弐冊あり、次に「仁風便覧」壱冊ハ天保四年〈及あり〉の同しく浪華書林中〈天保八年刊〉の刊行にして共に「御料所の施行簿」也、予昨年大阪へ出張の際、

其前者全二冊を購入したれとも今ハ三井家の珍蔵本たり、後者、便覧ハ京都及大阪ニ於て重複二冊を採集したるを以て其中の一冊ハ既に予カ私有に帰せり、たまたま今年名古屋古書肆其中堂に〔奉を抹消か、訪か〕書、集覧一冊のあることを知り、茲に大正弐年弐月拾四日之を購求するを得、漸く鼎足の二を得たり、〈於東京小石川寓居／鷦鷯軒主人万川識〉

後大正六年秋仁風一覧弐冊を大阪鹿田書店より購入す、是ニ於鼎足珍蔵を得たり

（〈　〉内は二行割書、【　】内は抹消、〔　〕内は引用者注）

この貼紙は、一九一三年に遠藤氏が『仁風集覧』を購入した当時の平塚理解の状況と、それに対する遠藤氏の見識をよく示している。平塚の名は、本多氏によって山陵研究家として紹介されていたが、経済史家の遠藤氏はそこに掲載されていた著述目録の内容に興味をそそられたのであろう。遠藤氏は、川田氏よりも早く、『仁風集覧』「今古米銭考」「救荒仁風扇」を平塚の著作と判断して注目し、その収集にいそしんでいたのである。

こうした遠藤氏の活動を知っていたかどうか明らかではないが、その後、経済学者滝本誠一氏が、『日本経済叢書』第三二巻に幕政の実態などをまとめた「末黒のすゝき」を、『日本経済大典』第四七巻に「末黒のすゝき」と経済論をまとめた「今古米銭考」を翻刻し、平塚の経世家・社会批評家としての一面を紹介した[20]。筆者は、地方で蓄えられた現場の知恵を収集しようとした滝本氏の史料集編纂を高く評価するものであるが、その中に平塚の著作が選ばれたこと自体意義深いことであった。

このうち「今古米銭考」（「今古米銭略考」とも）では、天保七年冬、飢饉による困窮者が三条大橋などに集まっているのを見るに見かねた平塚が、西町奉行佐橋佳富に了解を得た上で、三条河原に施療小屋を開設して、救療活動に

乗りだした経緯を記す。これによれば、平塚らは三条大橋普請の残木を利用して小屋を建て、困窮者を収容して医薬を施すことにしたという[21]。平塚は、救療活動の費用を官（幕府）から支出しようとすると何かと面倒で時間もかかるところから、有志者からの拠出を募ることにし、「多年の有志、高名の陰徳者」である熊谷直恭（蓮心）に相談したという。そこで、教諭所の儒者北小路三郎を発願者として、熊谷ら有力商人の出資を得て、翌八年初めから本格的に救療事業を開始したのである。北小路は、教諭所復興の願いも込めて救済活動に尽力したが、教諭所の復興に関わった心学者柴田遊翁は、「仮教諭所再度御引立に相成候趣、尤御所司代間部下総守様より御内意有之、平塚氏専ら御骨折之由に候」と記しており、平塚も内々相当の尽力をしたことがうかがえる[22]。天保の救済活動については川田氏はほとんど言及しないが、その後、この史料を引用した石川謙氏の研究や『京都府教育史』上巻などが取り上げるところとなる[23]。これらの研究は、熊谷家などの史料で平塚の記述を裏付けるものであった。

（3）公共の担い手として

戦後歴史学の展開の中で、しばらくは平塚を正面からとらえる研究はほとんどなく、川田論文を超えるものはあらわれなかった。そうした中で、新しい視点を示したのが安国良一氏である。安国氏は、近世の都市行政を検討する史料として平塚の著作を積極的に活用した。安国良一「町奉行所の役人」は、京都町奉行所の与力や同心の業務を初めて本格的に検討したものであり、その中で、平塚の「賑京私議」「自警録」（いずれも国立公文書館内閣文庫所蔵「清澄楼叢書」所収）を活用した[24]。さらに、安国良一「京都天明大火研究序説」は、「賑京私議」を「天保改革期の京都経済の低迷という状況下でその打開策を述べた意見書」と位置づけ、そこに記された京都の戸口の変遷を信頼性の高いものと評価した[25]。それに基づいて、寛政期の京都社会を分析したのである。

その後も平塚を正面から取り上げる研究は多くはないが、近年、平塚の著作を使って幕末の都市行政を論じようとするものがあらわれはじめている。ひとつは、小林丈広「幕末維新期京都の都市行政」で、平塚が慶応の救済活動を記録するために自ら編纂した『仁風集覧』を使って、その意義を検討した[26]。また、小川和也氏は『牧民の思想』など一連の研究で、近世の救荒や民政に関する文献を渉猟し、他の牧民書と比較しながら、平塚の『牧民心鑑解』出版の意義を明らかにし、宇佐美英機氏は「賑京私議」などを使って平塚の金融に対する理解を、牧知宏氏は、「賑京私議」「鵜鷺問答」（国立国会図書館所蔵「青菰雑誌」第三七巻所収）などに着目して、鴨川の洪水対策である平塚の鴨川浚構想と、安政三年に実行に移された鴨川土砂浚を検討した[27]。これらは、近年の近世政治史が、老中や町奉行、代官など様々な立場の違いを踏まえて論じるようになったことを背景にしたものといえよう。さらに、近世の地域社会の中に支配・被支配だけではなく、公共性の担い手を見いだそうとする研究の動向も影響を与えている。滝本氏が史料集に取り上げたように、平塚は町奉行所与力の中でも現場と世情に通暁し、その論は、同時代においては卓抜なものであった。そうした著作がようやく検討されるようになったのである。

さらに、最近の研究では、平塚が有能な与力であったことを前提として、その経世論を町奉行所の施策として実現していく力量にまで迫るようになっている。思想家や評論家としてではなく、町奉行所の政策に関わる行政家としての平塚の活動に光があてられているのである。そうした研究の端緒は前述の安国良一氏の研究に求められるが、前記の小林、宇佐美氏、牧氏らの研究を経て、最近では、幕末の米価高騰への対応や『仁風集覧』の刊行に尽力したことに着目した小林丈広の一連の研究、幕末の日岡峠の新道開発への関わりに言及した樋爪修氏、さらには湖北通船路をめぐり平塚らの構想と井伊直弼らとの確執を取り上げた鈴木栄樹氏の研究などがあらわれている[28]。とくに、安政の大獄とも絡まり合う政治的対立の再解釈を試みた鈴木氏の研究は、平塚をめぐる研究を大きく進展させるものといえ

よう[29]。これら最近の研究が共通するのは、平塚の立場を京都振興策（繁栄策）の提唱者、さらにそれを自ら政策を実現していくことができる存在として高く評価するものである。

そこで、次章では、こうした研究の進展を受けて、あらためて陵墓研究も含めた平塚という人物の特徴を探ることにしたい、

第二章　平塚飄斎と京都繁栄策

（1）平塚飄斎小伝

こうして平塚をめぐる研究史をたどると、陵墓研究家や随筆家として知られる平塚と、「賑京私議」『牧民心鑑解』『仁風集覧』などの著者・編者であり能吏として知られた平塚とに分裂した人物像をあらためて統一的に把握する必要があることがわかる。

そこで、上記の文献や手元にある史料などを参照しながら、平塚の歩みを簡単にたどってみたい。

平塚飄斎（茂喬）は、寛政六年（一七九四）閏十一月、京都町奉行所組与力平塚茂清（節斎）の子として生まれた。平塚節斎は、家塾として勧善館、市井には宣教館を設けて教育を行ったという[30]。

節斎の子茂喬は、勧善館で学んだ後、文化三年（一八〇六）に与力見習となり、天保五年（一八三四）に家督相続して与力となり、弘化四年（一八四七）まで勤めた。隠退後は「飄斎」と号して陵墓研究などで知られるようになるが、安政六年に大獄に連座して永蟄居を命じられる。ところが、文久二年に赦免され、同三年に再び町奉行所に出仕を命じられると、あらためて「利助」と名乗り、以後、町奉行所が廃止されるまで勤務した[31]。幕府から処分を受け

た者が、再び町奉行所に勤務するのも異例のことと思われるが、数多くの著作と共に、町奉行所外での活躍がこれほど知られている与力も珍しい[32]。

しかし、尊攘派志士世古格太郎が、「飄斎、役を勤し時吏事に長し、一時有名の人物にして、大坂に大塩平八郎、京に平塚と称せられたり」という時、大塩も平塚も与力本来の仕事振りについて評価されていることを見逃すことはできない[33]。大塩は、その謹厳さから、幕政の矛盾に悲憤慷慨して反乱へと至るが、平塚はむしろ、世事や人情に通じた能吏として知られていたようである。平塚と大塩を比較する議論は、前述の川田瑞穂氏の論文にすでに見られる。川田氏は、京都で平塚らが救済に取り組んだのに対し、大坂ではそれができなかったために大塩が乱を起こしたという見方を示しており、平塚は大塩研究にとっても重要な意味を持つが、これまでは大塩を高く評価する観点から、平塚に対する関心はさほど高まらなかった。京都の救済活動を検討することは、大塩研究にとっても意義深いのではないだろうか。

ところで、平塚の歩みはそのまま京都町奉行所内部の権力構造の変化を映す。安政六年の失脚と文久三年の再登用は、京都における幕府権威の消長と軌を一にしていた。この時期の京都町奉行所の与力・同心の動向をたどると、平塚と同様の歩みをした者に草間列五郎・砂川健次郎（政教）・喜多尾平次らがおり、文久年間に、これらの人々が復権したのと入れ替わるように姿を消した者に渡辺金三郎・加納繁三郎・森孫六・大河原十蔵らがいた[34]。平塚らの失脚の背景には、条約勅許や将軍継嗣などの問題を契機とする朝幕関係の悪化があった。平塚は、浅野長祚・川路聖謨・大久保忠寛らと親しく、大老に就任した井伊直弼の政敵とみなされたのである[35]。

安政の大獄が始まると、安政六年五月頃から京都町奉行所内部の探索も本格化し、井伊大老らと連携する渡辺・加納らによる木村勘助・草間・砂川らの告発が行われた。その結果、六月には平塚・木村・草間らに対する処分が行わ

れ、六月二十四日には木村が自害するに至った[36]。こうして町奉行所内部で力を増した渡辺らであるが、井伊直弼が暗殺され、尊王攘夷運動が活発化すると、文久二年九月、渡辺金三郎・森孫六・大河原十蔵が東海道石部宿で殺害される[37]。いわゆる天誅である。いったん引退や蟄居を余儀なくされていた平塚・砂川らに復権の機会が与えられるのは、こうした天誅騒ぎの直後であった。

平塚と砂川は、文久二年一〇月に永蟄居が解かれると、山陵奉行に任命されていた戸田忠至から諸陵寮御用掛に推薦されるなど、早くもその動向が注目されるようになる。また平塚は、翌三年一月に政事総裁職松平慶永に「時弊十事」を献策したと伝えられる（この献策は後年にまとめられた「幕臣平塚飄斎伝」によるが、他の文献による裏付けはまだ取れていない）。平塚は、「時弊十事」の中で、京都周辺の道路や河川の交通路を開き、物資の流入を促す必要性を述べる。「賑京私議」以来の主張をあらためて明確にしたものといえよう。平塚が与力として官界に復帰するのはその直後の同年二月であった。再出仕後の平塚は利助を名乗り、勘定方・公事方などといった従来からの与力の仕事のほか、加役として、運漕路取開並西川両高瀬通船掛、御救米掛、物価引下ケ方取扱掛、川方掛、江州勢多川材木一本流シ桴取扱掛、教諭所掛など様々な役目をつとめた[38]。

しかし平塚は、与力に再出仕した文久三年二月に起きた等持院の足利三代木像梟首事件について、厳罰を指示した京都守護職松平容保に対し、寛典を求めて動いたために疑惑を招くなど、その立場は安泰とはいえなかった[39]。このように、尊王攘夷派とのつながりが噂されていた与力を再登用したのは、幕府が朝幕関係の修復を図りながら、町奉行所の威信をも取り戻そうとしたからであろう。と同時に、物価高騰など生活不安を抱える京都の人々の民心を取り戻すために、世情に通じた能吏が求められたこともあったのであろう。井伊大老に近かったために失脚した渡辺、加納らも、町奉行所内では能吏として知られていたのではないかと思われるが、早急にそれらに代わる人材が必要とさ

れたのである。

慶応三年（一八六七）七月、幕政の行き詰まりから、京都の東西町奉行所が統合されると、平塚は砂川らとともに町奉行所支配調役に任命された。平塚はこれにより旗本に登用されたことになる。その後、明治維新によって町奉行所自体が廃止されると、平塚は京都府への就官を求められる。それに対し、平塚が高齢を理由に辞退したため、子の滋友が府の官吏となったのである。

（2）平塚研究の課題

こうしてあらためて経歴をたどると、いくつかの論点が浮かび上がってくる。まず第一に、平塚が、市井にも私塾を設立したと伝えられる父節斎や、先輩与力らからどのような影響を受けたかということである。それについては、「病間漫筆」が町奉行所与力同士が縁組みや養子などを通じて親密な文化圏の中にあることを明らかにし、「自警録」が歴代町奉行や町奉行所の内情について忌憚のない批評を記しているところからも読み取れることがあるが、小文では、それらの内容について詳しい分析を行うことはできない。今後の課題である。

次に、平塚は与力見習の時期から数えると、引退までの間に四十年あまりも町奉行所に出仕しており、働き盛りの四十歳頃には天保の飢饉を経験している。天保一三年（一八四二）六月に記されたとされる「賑京私議」は、そうした経験を踏まえ、内陸部という米や物資の輸送に不利な条件にある京都の振興策をまとめたものであった。その内容は以下の通りである(40)。

①御所向御尊敬幷ニ聖体御保養の為離宮を被造進度事

②京都盛衰幷洛中洛外人別多寡年中米穀入高等之事

③窮民御救ひ幷人減等の儀を予かしめ論し置へき事
④京都融通の為船の利を開きて北国の雑穀、奥州松前の諸産物直ニ着する様に成たきといふ事
⑤京都諸荷物運送差支なき仕法幷加茂川大浚等の事

この中で注目されるのは、②から⑤までの各項目が、いずれも京都の民政に関わるものであり、とりわけ物流や物価高騰に対する関心が高いということである。また、①は天皇の健康や離宮の整備に関わるものであるが、陵墓には言及していない。こうしたことから、筆者は、平塚がもともと何を重視していたかを読み取ることができると考えている。

すなわち、「賑京私議」において平塚が強調しているのは、京都振興策と町人の生活安定である。「窮民御救ひ」を掲げた③は当然のこととして、④も物流改善による京都の物価の安定を、⑤も鴨川治水による沿岸地域の生活安定を目指したものといえよう。

鈴木栄樹氏は、これらの中でも京都市中の生活問題に直結する物流改善、具体的には湖北通船路問題に着目し、その政治過程とその中での浅野長祚や平塚飄斎の役割を明らかにした(41)。小文では、それを受けて、平塚が天保期以来その手法としてきた有力商人との連携について整理しておきたい。

天保の飢饉の際に行われた救済活動の経験は、心学講舎を中心とする有力商人の実力をあらためて実感するものとなった。この活動の中心となった熊谷家などとの交流や文化的活動は、陵墓研究のネットワークとも重なるものであっただろう。平塚は、安政三年に実施した加茂川浚いでも有力商人による出資に依存した。しかし、有力商人との親密な関係は、安政の大獄時には彦根藩や幕府などから疑念を招く一因となった。

安政期に実行に移された湖北通船路の開削は、京都の積立米（「帝都御備米」）形成と結びついており、京都市中に

対する米価対策や食糧確保の一環であった[42]。ただ、そのために、京都の米市場に藩財政を依存していた彦根藩が打撃を受ける可能性があること、北陸からの新しい物資に関わる運送業や米商などが利益を受ける可能性があるところから、政争の原因となったのである。湖北通船路事業で重要な役割を果たした「京都糸割符村瀬孫助・酒井修理大夫用達小林金三郎」両人の、安政三年十二月二十二日付請書にも、「京都御備之御趣意」とあるように、発企人と町奉行所とは密接に連携していたのである。

また、この時期には難渋人救済を目的とする定世話場（施療所）設置の動きがあり、これについても京都西町奉行浅野長祚が「先年儒者北小路三郎教諭所取建相願承届候類例も有之、且は此度之願も全ク町人共之願共訳違、医師業体相応之願ニ而不相当之願ニも無御座」と述べているように、民政に関しては有力商人の発企に依存して施策を行おうとしていたことは明らかであろう[43]。

以上のような京都町奉行所の動きは、彦根藩の警戒するところとなり、安政四年三月三日付大津探索書では、浅野が北国諸藩の留守居役を呼び出し、「堀割新道出来ニ付、追々米指登シ、京都ニ囲米致候様御頼有之候哉ニ風聞仕」と指摘している[44]。ただ、井伊大老と連携する九条家としても京都市中の米価高騰や食糧問題に無関心でいられず、家士島田左近が「京都非常御手当米」について井伊側近の長野主膳に問いただすこともあった[45]。長野は安政六年六月、積立米の趣旨には賛成だが、水戸・越前両藩などが関与していることが反対の理由であると述べざるをえなかった[46]。

おそらく、京都町奉行所内の有力な与力らは、京都の物流改善を喫緊の課題と理解するところでは一致していたのではないかと思われる。それは、平塚とともに行動していた木村勘助、草間列五郎らが、同僚で彦根藩と連絡を取り合っていた加納繁三郎に忠告をするなど、ある時期までは意思疎通を図っていたと思われるからである[47]。しかし、

井伊が大獄を推進し、町奉行の更迭などを行う中で、井伊の意向に沿った活動を行う加納や渡辺金三郎らと、取り締まりの対象となった平塚、砂川、木村、草間、手島敬之助らとが対立させられ、「讒言」「探索」の応酬となる。

安政の大獄の際に作成された探索書の内容は、同僚の協力なしには行えない人間関係の機微に触れるものである。その中では、平塚、木村、草間、上田鉄之助らと、蝋燭商亀屋安兵衛、船頭長左衛門、祇園新地井上屋常次郎、質商八幡屋弥兵衛、米商伊勢屋長兵衛、あるいは菱屋久右衛門、誉田屋仁兵衛などとの「不正」な関係が詳細に描かれるのである(48)。

安政の大獄の構図を見ると、平塚とともに京都の民政に関心を寄せていた与力・同心の砂川・木村・草間らと加納繁三郎・渡辺金三郎らが対立しているようにも見えるが、加納・渡辺らも町奉行所内の能吏として職務を果たしていたといえよう。しかし、後者が藩財政に規定された彦根藩の意向に左右されていたのに対し、前者が敦賀・小浜など日本海側の商人とも連携しながら、藩を超えた物流の改善に乗り出そうとしていたところに、両者の違いがあったのではないだろうか(49)。筆者が前掲拙稿でも、平塚・砂川らを「改革派与力」と規定したのは、能吏の中でも、平塚グループが前述したような歴史的意義を有していると考えたからである(50)。

文久三年二月とされる平塚の与力再出仕の経緯、その後数多くの掛を兼務して取り組んだ諸事業などについても、具体的な検証が必要である。前掲拙稿などで述べたように、慶応の救済活動や日岡峠の新道付け替えなど、平塚が関与した諸事業においては、京都市中の有力商人が果たした役割が大きい(51)。幕末の政争の過程で、町奉行所の機能も弱まりつつあったため、平塚のような人物を登用して、その進言に従って施策を行う以外に、方法はなかったのであろう。京都市中の有力商人の事情に通じた平塚のような人物の発言力は、幕末の町奉行所の中でこれまでになく高まったのである。

こうしてみると、陵墓研究の側面が強調されてきた平塚飄斎であるが、京都市中の米価対策や物流改善にも大きな足跡を残したことがわかる。ここで強調したいのは、陵墓研究も困窮者救済も、日岡峠新道付け替えに代表される地域開発も、町奉行所機能の行き詰まり（大きくとらえれば幕政の行き詰まり）と、幕府領としての都市京都が抱える構造的問題への対処という、共通する問題意識の中から出てきたものだということである。

おわりに

小文では、京都町奉行所の与力平塚飄斎を素材に、戦前から戦後にかけての歴史学の展開を素描した。とくに、戦前における研究の到達点と、戦後における関心の変化、関係史料の状況と近年の研究の進展について、詳しく述べた。

これまで、平塚は陵墓研究家や随筆家としての面から注目されてきたが、近年は経世家・能吏としての役割が明らかになってきた。筆者はその両面を含む人物像を全体として明らかにするために、京都市中の有力商人との関係に注目しながら、関係史料を読み直した。

とくに、安政の大獄の際に浮き彫りとなった平塚ら「改革派与力」と有力商人との親密な関係は、平塚らの行政手法に関わるものとして注目に値する。それは、陵墓研究や加茂川浚い、慶応の救済活動にも共通するものであり、身分制が崩壊した後に地域社会の担い手となる有力商人が、公共的業務に関わる契機を作ったものとして評価できる[52]。

こうした平塚の活動が、足利三代将軍木像梟首事件で関与者の寛刑を主張して疑念を抱かれたなどといった逸話に

見られるように、尊王攘夷運動や戊辰戦争へとつながる草莽の政治的台頭の直接的契機になったのかどうかについては、いまだ山陵会や幕末の救済活動の実態解明が十分ではないものの、近世から近代への転換期を考える上で大きな手がかりになるものと考える。

注

(1) 小林丈広「幕末維新期の都市社会」宇佐美英機・薮田貫編『〈江戸〉の人と身分1都市の身分願望』吉川弘文館、二〇一〇年。なお、この論文に記した慶応の救済活動については、『新しい歴史学のために』二九二号（二〇一八年）で再論しているので、ご参照いただきたい。

(2) 『旧幕府』第五号、一八九七年。この雑誌は明治維新によって打倒の対象とされた江戸幕府の名誉回復を目的で発刊されていたものと思われ、松村論文も、幕臣である平塚の勤王家としての功績を顕彰することで、幕臣の再評価を試みたものと思われる。

(3) 本多辰次郎「山陵研究家平塚飄斎翁」、『皇陵』日本歴史地理学会、一九一三年（「山陵の探索及修理」の章、一三三頁以下）、和田軍一「皇陵」国史研究会編『岩波講座日本歴史』第五回、岩波書店、一九三四年など。

(4) 本多論文のもとになったと思われる平塚の履歴と著作一覧が、京都府立総合資料館蔵「館古396本多辰次郎文書（乙）」NO.36「山陵ニ付諸事書留メ」に綴られている。また同文書NO.65「諸事書留メノ綴リ」には本多の履歴書もあり、一九〇八年二月二四日から宮内省図書寮編修官になり、一九一〇年五月一三日から諸陵寮を兼務していることがわかる。

(5) 川田瑞穂「平塚飄斎」『日出新聞』に三〇回連載、一九一八年一月五日～二月四日付。川田は、一九二三年まで維新史料編纂事務局で維新史料編纂官補を務めており、その中で平塚についての調査を行ったものと思われる（『東京大学史料編纂所史史料集』同所、二〇〇一年、八二四頁）。のち漢学者として知られ、終戦の詔書（いわゆる玉音放送）の起草者として知られる。ほかに、海音寺潮五郎・山村耕花画「小説平塚飄斎」『皇陵』第一〇号・紀元二千六百年臨時増刊、一九三八年、寺田剛・雨宮義人『山陵の復古と蒲生秀実』至文堂、一九四四年など。

(6) 『書陵部紀要』第一六号、一九六九年。

(7) 『書陵部紀要』第三〇号、一九七八年。

(8) 大平聡「公武合体運動と文久の修陵」（『考古学研究』第一二二号（一九八四年）も同様で、平塚を重視していない。

(9) 代表的な成果として、奈良国立文化財研究所編『北浦定政関係資料』奈良国立文化財研究所、一九九七年をはじめとする、史料紹介をあげることができる。また、近年の陵墓研究には、高木博志・羽中田岳夫・上田長生・鍛治宏介・佐竹朋子氏らのものがある。

(10) 佐竹朋子「幕末の修陵事業」『明治維新史研究』第四号、二〇〇七年、同「藤堂藩と文久の修陵事業」『史窓』第六八号、二〇一一年など参照。佐竹氏の論考では、山陵会のことを「山陵研究会」と標記しているのが気になるが、氏によれば、三条が山陵会に参加したことを示す史料はないようである。一方、上田長生『幕末維新期の陵墓と社会』（思文閣出版、二〇一二年）第二章は、近年の研究の中では山陵会について詳しく述べたものであるが、その中心を京都西町奉行浅野長祚、与力平塚・砂川健次郎（政教）、高畠勘兵衛らであったとした上で、とりわけ谷森善臣の役割に注目する。近年の研究からうかがえるのは、平塚に対する関心の低下というよりも、浅野、北浦、谷森、高畠、疋田棟隆などに関する研究の進展により、三条や平塚の役割が相対化されつつあるということであろう。

(11) 堀田啓一「江戸時代「山陵」の捜索と修補について」（『考古学研究』第八一号、一九七四年）、外池昇『幕末・明治期の陵墓』（吉川弘文館、一九九七年）など参照。

(12) 和田萃「山陵家平塚飄斎」森浩一編『考古学の先覚者たち』中央公論社、一九八八年。ほかに、茂木雅博・山田邦和・中沢伸弘氏らの研究をあげることができる。

(13) 森銑三「平塚飄斎翁の研究」『歴史地理』第五〇巻第三～五号・第五一巻第一・三号の五回連載（一九二七～一九二八年、その後『森銑三著作集』第二巻、中央公論社、一九七一年に収録されており小文ではこれを参照した）。

(14) 「病間漫筆」は『随筆百花苑』第五巻、一九八二年、中央公論社（解題は野間光辰）。『花洛名勝図会』は『日本名所風俗図会』第七巻、角川書店、一九七九年（解題は竹村俊則）や『立命館大学図書館所蔵善本復刻叢書・近世風俗・地誌叢書』第四～五巻、龍溪書舎、一九九六年（解題は樋爪修）がある。戦前には、青木正児「京都を中心として見たる狂詩」（『芸文』一九一八年八月～一〇月連載、のち『青木正児全集』第二巻、春秋社、一九七〇年所収）が狂詩家「武朝保」を紹介する。ちなみに、この論文は中島棕隠に関連して「天保蝶々踊」にも言及しており、長谷川伸三『近世後期の社会と民衆』雄山閣出版、一九九九年に通じる視点を見せている。幕末期文人の社会問題への関心に着目した先駆的な研究といえるが、残念ながら「武朝保」が平塚のことであることは明らかにされておらず、森論文がその点を指摘した。その後、『中島棕隠集』（上

方芸文叢刊刊行会、一九八〇年）の「解題」（野間光辰）が、中島と平塚の関係を詳しく記す。平塚は雅号が多いため、著作と平塚を結びつけるためには、こうした考証が不可欠である。近年では、西野由紀「『再撰花洛名勝図会』の作者と全体像」『国文学論叢』第五一号、二〇〇六年などもある。

(15) 「贈正五位平塚飄斎伝」は、新聞連載のもとになったと思われる原稿で、東京大学史料編纂所所蔵。

(16) 平塚の追贈は一九一四年一一月で、この時、正一位の豊臣秀吉、従一位の三条西実隆・山科言継をはじめ、数多くの歴史上の人物が追贈された。平塚と同じ正五位を贈られた者には、北条実時、中沼了三、新宮凉庭ら多種多様な人々が含まれた（『贈位諸賢伝』全二巻、国友社、一九二七年、平塚の記事は第二巻、三六六頁にある）。

(17) こうした視点から見た平塚は、大塩平八郎研究者石崎東国（酉之允）からも注目され、その要約が「平塚飄斎と大塩平八郎」として『陽明』第七四号（一九一八年）に掲載された。これは川田の執筆とされているが、実際には川田論文を石崎が要約したものである。

(18) 遠藤については、小田忠「遠藤佐々喜覚え書き」『大阪商業大学商業史博物館紀要』第四号、二〇〇三年参照。

(19) 遠藤が平塚に注目していたことについては、『「仁風」史料集成』（近現代資料刊行会、二〇一六年）を作成する作業の中で明らかになったので、ここで詳しく述べておきたい。

(20) 『日本経済叢書』第三二巻、日本経済叢書刊行会、一九一七年、『日本経済大典』第四七巻、啓明社、一九三〇年

(21) この時三条大橋で普請があったことは町触で確認できる（『京都町触集成』第十一巻、岩波書店、一九八六年、四七頁）。

(22) 石川謙『石門心学史の研究』岩波書店、一九三八年、一一八一頁参照。

(23) 京都府教育会編『京都府教育史』上巻、京都府教育会、一九四〇年。

(24) 『京都町触の研究』岩波書店、一九九六年所収。

(25) 『日本史研究』第四一二号、一九九六年。

(26) 伊藤之雄編『近代京都の改造』ミネルヴァ書房、二〇〇六年所収。筆者は、これに先立つ『明治維新と京都』（臨川書店、一九九八年）で、天保の救済活動、平田派国学者といった尊攘運動との関わりなど、幕末の平塚について多面的に紹介した。

(27) 小川和也『牧民の思想』、平凡社、二〇〇八年。宇佐美英機『近世京都の金銀出入と社会慣習』、清文堂出版、二〇〇八年、一八五～九頁、二五三～六頁、牧知宏「近世後期京都における防災対策と都市行政」『歴史都市防災論文集』第一号、二〇〇七年所収。小川氏の関連論文に、「牧民官の時代」『一橋論叢』第一三四巻第四号、二〇〇五年、「近世日本における『牧

民忠告』の受容と展開」『日韓相互認識』第一号、二〇〇八年などがある。

(28) 注(1)拙稿及び小林丈広「嘉永の施行における町の役割」『ヘスティアとクリオ』第一〇号、二〇一一年、同「幕末維新期京都における都市振興策と公共性」『日本史研究』第六〇六号、二〇一三年、樋爪修「幕末期京津間の物資流通―『大津御用米会所要用帳』を素材として―」『日本史研究』第六〇三号、二〇一二年、大津市歴史博物館編『車石』大津市歴史博物館、二〇一二年、鈴木栄樹「幕末の鴨川水害と鴨川浚計画」『京都市政史編さん通信』第四一号、二〇一一年、同「平塚飄斎の述作「賑京私議」(抄出)」『京薬論集』第一九号、二〇一二年、同「「京都御備」としての安政期の湖北通船路開鑿事業―彦根藩と小浜藩との対立を軸とした通説の根本的再検討を通じて―」『人文学報』第一〇四号、二〇一三年など参照。

(29) 前掲注(28)「「京都御備」としての安政期の湖北通船路開鑿事業」。

(30) 前掲注(3)本多論文など。節斎が設けたとされる宣教館と、教諭所の宣教館との関連性については不詳。

(31) 「平塚飄斎令条抜粋集(抄)」東京大学史料編纂所蔵維新史料引継本Ⅱに122―2など参照。

(32) 『大塩研究』のような専門誌がある大塩平八郎を別格とすると、町奉行所の与力・同心の中で比較的知られている者に、京都の神沢貞幹(井ヶ田良治「京都町奉行所の与力について」『京都地域史の研究』国書刊行会、一九七九年)、大坂の内山彦次郎(藪田貫「大坂町奉行所与力・内山彦次郎の生涯」『それぞれの明治維新』吉川弘文館、二〇〇〇年)、江戸の佐久間長敬(横倉辰次『与力・同心・目明しの生活』雄山閣出版、一九八〇年、佐久間は原胤昭の実兄)らがいる。

(33) 「唱義聞見録」『日本史籍協会叢書別編35雑三』東京大学出版会、一九七五年、一五六頁。

(34) 京都市歴史資料館編『京都武鑑』下、京都市歴史資料館、二〇〇四年など参照。

(35) 前掲注(28)「「京都御備」としての安政期の湖北通船路開鑿事業」参照。

(36) 『井伊家史料幕末風聞探索書』中、雄山閣出版、一九六七年、『大日本維新史料』類纂之部井伊家史料十九～二十、東京大学、一九九五年～一九九七年参照。

(37) 『官武通紀』一、続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、一九一三年・一九七六年復刻、三〇一～三〇四頁参照。

(38) 「幕臣平塚飄斎令条抜粋集」東京大学史料編纂所蔵

(39) 山川浩『京都守護職始末』第一巻、平凡社、一九六五年、七四～七七頁によれば、志士や攘夷派町人と親密な関係にあった飄斎は、京都守護職の捜査方針を世古格太郎に漏らしたとの嫌疑を受け、自殺を図ったという。

(40) 前掲注(28)「幕末維新期京都における都市振興策と公共性」参照。

(41) 前掲注(28)「「京都御備」としての安政期の湖北通船路開鑿事業」参照。
(42) 十二月二十二日付家老宛筋奉行用状（前掲注(36)井伊家史料四、四八五～四九一頁）など参照。
(43) 十二月二十二日老中宛京都町奉行浅野長祚見込書（写）（前掲注(36)井伊家史料四、五〇一～五〇三頁）など参照。
(44) 前掲注(36)井伊家史料五、一〇九頁。三月六日城使宛在藩側役用状（案）（前掲注(36)井伊家史料五、一〇九～一一四頁）にはそうした疑念に対する彦根藩の動きが詳しく記されている。
(45) （安政五年）五月二十一日彦根藩系譜編集用長野主膳宛九条家家士島田左近書状、五月長野主膳宛島田左近趣意書など参照（井伊家史料六、二二五～二三六頁）。
(46) 六月二十八日彦根藩側役兼公用人宇津木景福宛長野義言書状（前掲注(36)井伊家史料一九、二四八頁以下）。
(47) （安政六年）五月八日彦根藩側役兼公用人宇津木景福宛同藩留守居後閑義利・長野主膳書状（井伊家史料十九、五七～五九頁）参照。
(48) 五月京都町奉行宛京都町奉行与力探索書（写）（前掲注(36)井伊家史料十九、一四八頁以下）、七月十三日長野義言宛京都西町奉行与力渡辺金三郎並京都東町奉行与力加納救匡書状（井伊家史料二十、三四頁以下）、七月十七日長野義言宛小浜藩士三浦吉信書状（井伊家史料二十、四五頁以下）、八月十二日長野義言宛九条家家士島田竜章書状（井伊家史料二十、一三五頁以下）など参照。
(49) これまでの研究では、湖北通船路計画に関わった京都商人村瀬孫助・小浜藩御用達小林金三郎の人物像が明らかになっていないので、今後はこうした有力商人の実態解明が必要であろう。村瀬家については、尾脇秀和「幕末期京糸割符の動向とその終焉」『日本史研究』第五九九号、二〇一二年参照。
(50) 前掲注(1)「幕末維新期の都市社会」参照。
(51) 前掲注(1)「幕末維新期の都市社会」参照。
(52) 前掲注(28)「幕末維新期京都における都市振興策と公共性」参照。

付記

今年度末に文学部を退職される三先生には、筆者着任以来たいへんお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。小文は、松藤和人先生のご退職に合わせ、日本の考古学史上にもその名が残る平塚飄斎に関する研究史を筆者なりの視点で整理

したものです。なお、小文作成にあたっては、飄斎の子孫、平塚克己氏より種々ご教示いただきました。また、二〇〇六～二〇一一年度三菱財団学術研究助成金「近代日本における大都市参事会制度の基礎的研究」（研究代表者小林丈広）、二〇〇八～二〇一〇年度科学研究費助成金基盤研究（B）「近代古都研究」（研究代表者高木博志）、二〇一二～二〇一五年度科学研究費助成金基盤研究（C）「近代日本における都市制度形成過程の総合的研究」（研究代表者小林丈広）などの助成を受け、京都大学人文科学研究所近代天皇制と社会研究班二〇一六年一〇月例会で報告させていただきました。それぞれの関係者にも御礼申し上げます。